

CONTENTS

WEDGE_SPECIAL_REPORT

ジェンダー平等と多様性で 男性優位の社会を変えよう

16

18 **PART 1** 納得感なきジェンダー平等 日本は「オッサンの壁」を壊せ
佐藤千矢子 毎日新聞社 論説委員

21 **COLUMN 1** 気づいていますか？ 女性たちが感じるジェンダー 編集部

22 **DATA** データで見る男女平等 これが日本の「現在地」 編集部

24 **PART 2** 「わたし」としての人生を生きる 日本でも「静かな革命」を
湯澤規子 法政大学人間環境学部 教授

28 **PART 3** 女性を「忘れた」、時代からフランスが転換できた理由
高崎順子 フランス在住ライター

30 **COLUMN 2** 女性参画で生まれたヒット商品
大切なのは「利用者の視点」 編集部

32 **PART 4** 拝啓 令和を生きる女性たち 今、学ぶべきは女性の歴史
石井妙子 ノンフィクション作家

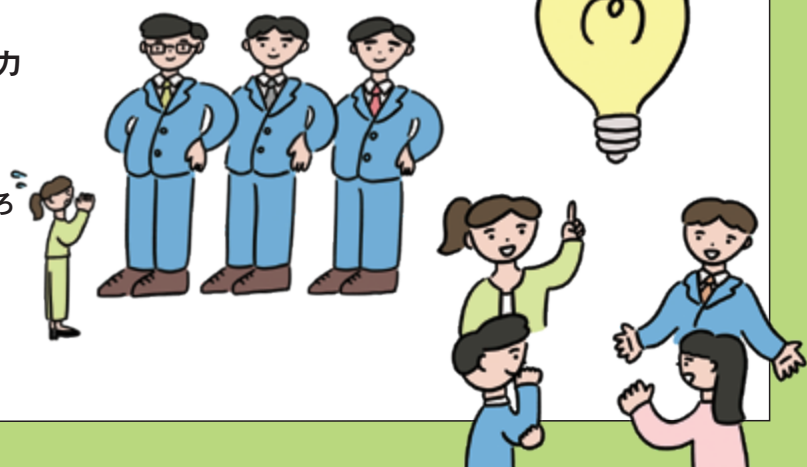
36 **INTERVIEW 1** 男だから、女だからではない
価値を生む多様性の本質
得能摩利子 三菱マテリアル 社外取締役、フェラガモジャパン 元CEO

38 **COLUMN 3** 女性採用を契機に脱皮を果たしたある中小企業の挑戦 編集部

40 **PART 5** スローガンが氾濫する日本 唱えるからには中身の吟味を
與那覇 潤 評論家

44 **INTERVIEW 2** 相互理解と共存の鍵握る能力
「エンバシー」をどう育むか
ブレイディみかこ コラムニスト

46 **PART 6** アフリカの旅で考えた差別意識の出どころ
藤原章生 毎日新聞記者、ノンフィクション作家



WEDGE_SPECIAL_OPINION

ウクライナ侵攻から2年 日本人に問われていること

66

PART 1

〘20世紀型〙はもはや限界 長期戦見据え抑止力の再構築を

宮家邦彦 キヤノングローバル戦略研究所 理事

68

PART 2

欧米に見られる「支援疲れ」今こそ日本流で独自の貢献を

廣瀬陽子 慶應義塾大学総合政策学部 教授

71

Column

ウクライナでも稼働！世界に誇る日本の「モバイル浄水器」 編集部

74

PART 3

本音と諦観が渦巻くロシア 大統領選でルビコンを渡るか

黒川信雄 産経新聞社 元モスクワ特派員

76

WEDGE_OPINION

「賃金と物価の好循環」実現で 「金利のある世界」に備えよ

渡辺 努 東京大学大学院経済学研究科 教授

8

医療費46兆円の時代 単価でなく受診回数抑制の改革を

成瀬道紀 日本総合研究所調査部 主任研究員

58

WEDGE_REPORT

地震防災対策に長寿命化 あなたのマンションは大丈夫？

中西 享 ジャーナリスト

12



012



008



066

WEDGE_REGULARS

- 51 商いのレッスン | 笹井清範 事業の〆あり方。と〆やり方。
-
- 56 偉人の愛した一室 | 羽鳥好之 堀 辰雄 「奈良ホテル」(奈良県奈良市高畑町)
-
- 79 MANGAの道は世界に通ず | 保手濱彰人 実はみんな女性になりたがっている？ VRによる制約の解放
-
- 80 インテリジェンス・マインド | 小谷 賢 ソ連への内通者「モグラ」を探せ！ CIA対KGBの戦い
-
- 85 誰かに話したくなる経営学 | 岩尾俊兵 「ただの石」を「重要資源」に 半導体製造を支えているもの
-
- 86 時代をひらく新刊ガイド | 稲泉 連 『老化は治療できるか』 河合香織
-
- 89 近現代史ブックレビュー | 筒井清忠 『戦時下の演劇 国策劇・外地・収容所』(編) 神山 彰
-
- 90 フィクサー | 真山 仁 第二章 箱口
-
- 98 モノ語り。 | 水代 優 コーヒー豆の「エルドラド」 イフニココーヒー
- 50 一冊一会
61 各駅短歌 穂村 弘
87 拝啓オヤジ 相米周二
102 読者から／ウェッジから



「賃金と物価の好循環」実現で 「金利のある世界」に備えよ

今年も春闘の季節を迎えた。賃上げの実現は既定路線で、日銀の金融政策も正常化に向かうだろう。「金利のある世界」の到来後も、「賃金と物価の好循環」のために国民全体で機運を高めるべきだ。



渡辺 努

Tsutomu Watanabe

東京大学大学院経済学研究科
教授

1982年東京大学経済学部卒業、日本銀行入行。92年米ハーバード大学経済学博士。2011年より現職。15年に経済統計をリアルタイムで提供するベンチャー企業「ナウキャスト」を設立。著書に『物価とは何か』（講談社選書メチエ）、『世界インフレの謎』（講談社現代新書）。

世

の中には「社会通念（ノルム）」というものがある。「こうあるべき」「こうあらねばならない」という人々の暗黙の了解であり、それらは時に（強力な）社会の規範にもなりうる。

日本社会でこれが典型的に表れているものの一つが賃金と物価（の抑制）である。「賃金が上がらないのは当然だから我慢して働くべき」「企業はいいものを安く売るのが当たり前だから1円も値上げしてはならず、物価は据え置かれるべき」。こうした人々が当たり前だと思っていた意識が、今、急速に変化し、20年にもわたるデフレの時代から、インフレの時代への転換が本格的に始まろうとしている。

日本の物価は2022年の春から上



昇し始め、22年末の消費者物価指数（CPI）は4%を記録した。消費者物価は食料品などの生活必需品に該当する「モノ」と、飲食やホテル、医療、娯楽、交通などに該当する「サービス」に大別される。

日本のインフレは海外から輸入した原材料やエネルギー価格の上昇が原因であり、企業がそれを価格転嫁したこ

とでモノの価格が上昇した。輸入物価の上昇はすでに一服し、23年8月から9月をピークに少しずつインフレ率が下がり始めている。輸入物価の上昇は、果てしなく続くものではない。

一方、サービス価格も上昇している。サービスの原価は人件費の割合が高く「賃金の塊」とも言われており、輸入価格上昇による影響は限定的で、当初

はそれほど伸びなかった。ただ、コロナ禍明けのインバウンドや国内旅行需要の増加によって、宿泊料金などのサービス価格は上昇しており、サービスのインフレ率はモノと同程度になっている。昨今の人手不足もあり、今後はじわじわと上昇していくだろう。

23年はインフレを起こす「主役」がモノからサービスに移行した年であり、今年はさらに顕在化し、インフレが緩やかに持続していくはずだ。

日本列島が「賃上げ」のニュースに沸いてから1年が経ち、今年も春季労使交渉（春闘）が本格化している。昨年の春闘では連合の集計で平均賃上げ率が3・58%と約30年ぶりの高い水準となった。消費者のインフレ予想や値上げに対する耐性は高まっており、今年の春闘でも大幅な賃上げの実現は既

元

日に北陸地方を襲った
最大震度7の能登半島
地震により、近い将来
に発生が予想されてい

る大規模地震に対する防災対策がクロ
ーズアップされている。中でも都心部
に密集して林立しているマンションの
対策は急務だ。高度成長期に建てられ
たものは老朽化し、大規模な修繕を迫
られるマンションが急増する。防災対
策と長寿命化をどうやって進めるの
か、マンション管理の現状を報告する。

自主防災に動き始めた マンション

大地震などが起きた時は、避難所ス
ペースが限られるため、大都市ではマ
ンションの中にとどまった方が安全と
されている。東京都港区芝浦にあるタ
ワーマンションの「芝浦アイランドケ
ープタワー」（1096戸、48階建て、
2006年完成）は、一つのフロアに
25世帯前後が居住しており、食料や水
は自給が基本だが、3日分の備蓄を各
階に設けている。エレベーターは17基
あるが、大地震発生時には1基だけ緊
急用に非常電源で稼働させる。各階ご
との安否確認を行う防災訓練は、トラ

WEDGE REPORT

地震防災対策に長寿命化 あなたのマンションは大丈夫？

能登半島地震によって改めて「マンションの防災対策と長寿命化」に注目が集まっている。
そこでカギとなるのが管理組合の意識と行動だ。



文・中西 享 Toru Nakanishi
ジャーナリスト



40年を超す高経年のマンションも今後爆発的に増える



Wedge Special Report

ジェンダー平等と多様性で 男性優位の 社会を変えよう

佐藤千矢子、湯澤規子、高崎順子、石井妙子、得能摩利子、與那覇 潤、
ブレイディみかこ、藤原章生、編集部（野川隆輝、野口千里、梶田美有、友森敏雄）

イラストレーション・ニシダミク

「育

児休暇や時短勤務を活用
して子育てをするのは
『女性』の役目」「残業も

厭わず働き、成果を出す『女性』は立派だ」。働く女性が珍しい存在ではなくなった昨今でも、こうした固定観念を持つ人は多いのではないか。

今や女性の就業者数は3000万人を上回り、男性の就業者数との差は縮小傾向にある。こうした中、経済界を中心に、多くの組織が「女性活躍」や「多様性」の重視を声高に訴え始めている。これ自体は歓迎すべき動きと言えるだろう。

だが、肝心なのは、中身である。内閣府が2022年に実施した世論調査では、約79%が「男性の方が優遇されている」と回答したほか、民間企業における管理職相当の女性の割合は、課長級で約14%、部長級では8%まで下がる。また、正社員の賃金はピーク時で月額約12万円の開きがある。政界でも、国会議員に占める女性の割合は衆参両院で16%（23年秋時点）と国際的に見ても極めて低い。

女性のエンパワーメントとジェンダー平等を目的に活動するHAPPY WOMAN（東京都港区）の小川孔一

20

年ぶりに紙幣の顔が新しくなる。1万円札が渋沢栄一、5000円札が津田梅子、10000円札が北里柴三郎という顔ぶれ。いずれも近代日本の発展に貢献した人である。

この人選に異を唱えるつもりはないが、資本主義の祖であり人間的な魅力に富む渋沢も女性関係は放埒で、妻妾を同居させた人であった。医学界に大きな功績を残した北里も、花柳界ではとりわけ半玉と言われる芸者見習いの少女たちを好んだことで知られる。半玉たちは彼の座敷に呼ばれると、身を固くしてうち沈んだという。

「今とは社会通念が違う」「現在の価値観で過去を断罪すべきでない」という意見もある。とはいえ、2024年の新札の顔を選ぶにあたり、こうした点はどう考慮されたのか。まったく不問としたのだろうか。

「そんなことを言ったら誰も選ばれない」「全員、女性にするしかなくなってしまう」

そんな声も聞こえてきそう。確かにそのとおりで、名をなした男性の中に一夫一婦制を守った、という人を探

PART
4

拝啓 令和を生きる女性たち 今、学ぶべきは女性の歴史

「女である」という一種のハンディを背負った女性たちの生涯は多様で、魅力的だ。女性の生涯を描いた作品を数多く手掛けてきた筆者が伝えたい、今を生きる女性たちへのメッセージとは――。



文・石井妙子

Taeko Ishii

ノンフィクション作家

1969年神奈川県生まれ。白百合女子大学国文学部卒、同大学院修士課程修了。2021年、『女帝 小池百合子』（文藝春秋）で大宅壮一ノンフィクション賞受賞。著書に『おそめ 伝説の銀座マダム』（新潮文庫）、『原節子の真実』（新潮社／新潮ドキュメント賞受賞）など、女性にフォーカスした著書多数。

BUNGEISHUNJU

スローガンが氾濫する日本 唱えるからには中身の吟味を

「ダイバーシティ」「SDGs」「DX」……。昨今日本では、こうした聞こえのいい言葉が飛び交う。だが、重要なのは装飾された言葉ではなく、その内実に目を向けることだ。



文・與那覇 潤
Jun Yonaha
評論家

1979年生まれ。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。博士（学術）。公立大学准教授を経て評論家に。『中国化する日本』（文春文庫）など著書多数。近著に『ボードゲームで社会が変わる』（河出新書、共著）、『危機のいま古典をよむ』（而立書房）。



「御

社は多様な人材をそろえていますか？」と尋ねられれば、誰でもわかるし答えられるのに、わざと「御社は『ダイバーシティ』に配慮していますか？」という質問にする。耳新しい用語だから、問われた側は内容も未知のことなのだろうと思ひ込み、不安になる――。

『翻訳語成立事情』（岩波新書）などの研究で知られる柳父章は、こうした現象を「カセット効果」と呼びました。カセットとはキラキラした装飾が施された小箱（宝箱）のことで、いかにも高価なものが入っているそうだが、中身はわからない。しかし外面しか見えないからこそ、「箱の中もすごいに違いない」と錯覚され、価値あるものとして流通する。

新しい用語という「入れ物」の印象だけで、実際の内容は不明なままでも、特定のフレーズが広まってしまうことがあります。そうした空疎なマーケティングは、社会問題を改善するどころか、しばしば空回りさせます。

たとえば日本の「ジェンダーギャップ指数（GII）」が、2023年は146カ国中125位で、過去最低に

相互理解と共存の鍵握る能力 「エンパシー」をどう育むか

他者の靴を履くためには、自分の理解を疑うことが必要だ。

聞き手／構成・編集部（野口千里）

エンパシーとは、「その人の立場だったら自分はどう感じ、どう考えるのかを想像して、理解する能力」のこと。英国在住のコラムニスト、ブレイディみかこ氏に日本で生かすべきエンパシーのあり方を聞いた。

QUESTION

ジェンダーギャップ指数の低さなど、英国から日本の現状をどう見ているか。

ブレイディ

日本のあるテレビ局で、部下の女性たちが普段行っている業務を男性上司が実際に体験してみるという番組が放送された。まさしく相手の立場に立つ、つまり、「他者の靴を履く」という実験である。

お茶出しなんて簡単なことだと思っていたが、女性たちはこんなに細かいことまで考えてやっていたのか――。

男性上司はそう感じたようで、他者の靴を履いて初めて分かることがあると

実感した様子印象的だった。

日本のジェンダーギャップ指数は依然として低く、日本社会や企業の中から「何とかしなければ」との思いは伝わってくる。これ自体、良い兆候だ。

ただし、自分はエンパシーを働かせているつもりであっても、本当に正しく想像できているか、自問自答することが欠かせない。特に男性は「自分はエンパシーを持っているから女性のことはよく分かっている」と過信しないことが大切だろう。

海外の事例を挙げたい。ジェンダーギャップ指数が14年間連続1位のアイスランドは、ウイメンズストライキを行う国として有名である。1975年の初めてのストライキは、90%以上の女性が、一日間、仕事も家事も放棄したという大胆なものだった。女性たちが働かないことで新聞は半分の厚さになり、スーパーマーケットでは、調理



ブレイディみかこ
Mikako Brady
コラムニスト

1965年、福岡県福岡市生まれ。英国ブライトン在住。ライター、コラムニスト。2019年『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』（新潮社）で毎日出版文化賞特別賞など複数受賞。近著に『私労働小説 ザ・シット・ジョブ』（KADOKAWA）など。

SHU TOMIOKA

が簡単なソーセージを男性が買い、売り場から無くなったという。男性にとっては「生涯で一番長い日」とも言われ、アイスランドはこのストで「女性のありがたみ」を感じ、社会の変革が進んでいった。ここまでやってようやく男性の認識も変わったという側面もあるだろう。

日本の政治指導者は圧倒的に男性が多く、私には固定観念にとらわれているように見える。彼らの根底には「ぶれないことが良い指導者」という考え方があってはならないか。もちろん、ぶれないことも必要だが、それだけでは軌道修正が必要な場面で融通が利かないことがある。一方、コロナ禍においてドイツのメルケル首相やニュージーランドのアダーン首相、台

QUESTION

日本には、上の言うことは従う、波風立てないことが是という固定観念が根強い。

ブレイディ

私は時折、日本の働く女性たちと座談会をすることがある。彼女たちは私たちの世代と違い、「むかつく」とは直接言わず「モヤッとしている」などの表現を使い、会社や上司の不満を述べる。まさに「愚痴会」である。ただ、私は「革命（や変化）」は

湾の蔡英文総統などの女性指導者は、エンパシーを働かせて苦しむ市井の人々の靴を履いて対応し、国民にメッセージを送り続け、支持も高かった。固定観念にとらわれない女性の指導者を増やすことは、より多くの、より多様な人々の声を拾い上げることににつながる。それは、男性女性双方にとっても、より良い社会のはずだ。



昨

年初夏、『差別の教室』（集英社新書）

という本を出版した
藤原章生と申しま

す。中央大学法学部で差別について話した21回の講義録をまとめたもので、日本や世界各地での実体験を紹介しています。

私が差別について考えたきっかけは2001年春までの5年半のアフリカ駐在でした。当時、私は南アフリカのヨハネスブルクに暮らしながら、年の半分近くをサハラ砂漠以南のコンゴ民主共和国（旧ザイール）など、内戦や紛争を抱えていた現場を中心に取材していました。

いま私はそのアフリカを22年半ぶりに訪ねています。昨年11月半ばにスペインから海峡を渡って西アフリカまで陸路を南下してきました。各地に長居したため、コートジボワールから南アフリカに飛び、1月末現在はヨハネスブルクの外れにあるソウェト地区の友人宅に寄宿しています。

22年半ぶりのアフリカで気づくことはいろいろありました。一番大きかったのは、人当たりがとても良いということでした。モロッコ、モーリタニア



スペインからモロッコに渡り、アフリカ大陸を再訪する5カ月の旅に出た著者（右）。アジアといっても一つにくれないようにアフリカには、多様な世界が広がっている
AKIOFUJIWARA

PART
6

アフリカの旅で考えた 差別意識の出どころ

毎日新聞の記者としてアフリカに駐在した著者が22年半ぶりに訪れた。
旅をしながら「差別」の本質と向き合うことで見えてきたものとは？

文・藤原章生
Akio Fujiwara

毎日新聞記者、ノンフィクション作家

1961年生まれ。北海道大学卒業後、住友金属鉱山に入社。89年に毎日新聞記者に転じる。ヨハネスブルク特派員、メキシコシティ支局長、ローマ支局長などを歴任。『絵はがきにされた少年』（集英社）で開高健ノンフィクション賞を受賞。『ぶらっとヒマラヤ』（毎日新聞出版）など著書多数。

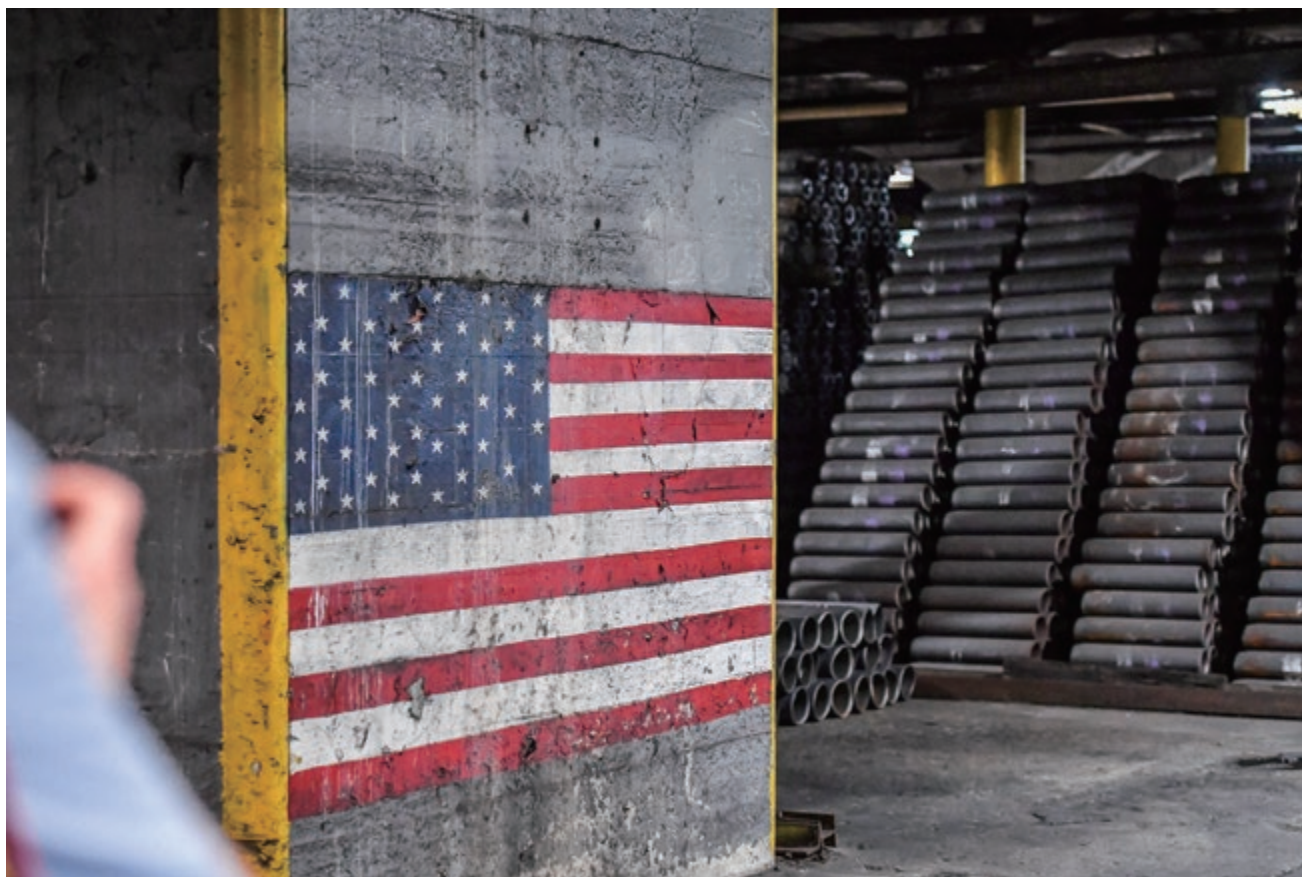


WEDGE SPECIAL OPINION

ウクライナ侵攻から2年 日本人に問われていること

ロシア・ウクライナ戦争の開戦から2年。戦争は「当たり前の光景」になり、
西側諸国の足並みが乱れつつある今、民主主義の力が試されている。
国際社会、そして、日本はこの戦争にどう向き合うべきか。

宮家邦彦、廣瀬陽子、黒川信雄



今回の戦争は「弾薬不足」という新たな課題を突き付けた。米国を中心とする抑止力を再構築する必要がある

SPECIAL OPINION PART 1

〃20世紀型、はもはや限界 長期戦見据え抑止力の再構築を

欧州と中東、インド太平洋は一つの戦域に統合されつつある。

〃20世紀型の戦い方、を見直し、抑止力を再構築しなければならない。



宮家邦彦 Kuni Miyake

キャノングローバル戦略研究所 理事

1978年東京大学法学部卒業後、外務省入省。日米安全保障条約課長、在中国大使館公使などを歴任し、2005年に退官。内閣官房参与（外交）、外交政策研究所代表を兼務。

口

シア・ウクライナ戦争の開戦から2年。現時点、この戦争の結末は見通せない。

過去10年を振り返ると、第二次世界大戦以降、世界を支配してきた国際主義やグローバリズムが停滞し始めた。その反動は米国のトランプ現象や欧州の極右勢力台頭に代表されるように、

自国第一主義やナショナリズム、排外主義、同盟の軽視といった形で顕在化した。この間、国際協調主義やリベリズム、自由貿易などを標榜していた政府が弱体化し、中国やロシアなどの現状変更勢力の力が強まり、彼らが実際に力による現状変更を始めた。

それが顕著になったのがこの2年間だ。欧州では北大西洋条約機構（NATO）がロシアのウクライナ侵攻の抑止に失敗し、中東では米国とイスラエルがイランを後ろ盾とするハマスの抑止に失敗した。

イスラエル・ハマス戦争についても言及したい。中東地域の〃地殻変動〃の端緒はトランプ政権が米軍のアフガニスタン撤退を決定した時期にさかのぼる。中東諸国は米国の中東への関心低下を感じ取り、外交上の立ち位置の〃リポジショニング〃を始めた。特に、湾岸地域のアラブ首長国連邦（UAE）やサウジアラビアは、経済力は豊かであるものの軍事力に乏しい。自国の安全保障を確保するため、UAEをはじめとするアラブ諸国は「アブラハム合意」でイスラエルと国交正常化し、サウジアラビアはイランとの外交関係正常化やイエメン内戦の終結に向けて動

ロ

シア・ウクライナ戦争は長期化の様相を呈している。戦争勃発直後は、ウクライナの高い

士気に基づく善戦が目立ち、欧米のほとんどの国々が一丸となってウクライナを支援した。段階的ではあったが、北大西洋条約機構（NATO）水準の兵器がウクライナに供与され、ウクライナ兵はそれらを使用するための訓練も受けた。ウクライナは情報戦、サイバー戦でも善戦し、UAV（ドローン）を用いた戦いや国産の優れたUAVの大量生産という面でも目覚ましい結果を残し、正規戦と非正規戦を組み合わせた戦争の手法である「ハイブリッド戦争」を見事に展開した。

他方、力による現状変更を目指したロシアは、欧米諸国から最高レベルの制裁を発動された。軍の指揮命令系統や補給のまずさ、兵士の士気の低さが目立つ展開となり、民間軍事会社ワグネル（2023年8月の幹部死亡により事実上消滅）、国内の少数民族や囚人、海外から集めた傭兵らにより構成される突撃部隊を駆使した人海戦術、大量のミサイル攻撃など、カネと物量に任せた非合理的な戦略が目立った。

SPECIAL OPINION PART 2

欧米に見られる「支援疲れ」 今こそ日本流で独自の貢献を

戦争は長期化し、エネルギーと食料を握るロシアに有利な展開となっている。「ウクライナ支援疲れ」の流れを払拭するために、日本には何ができるか。



廣瀬陽子 Yoko Hirose

慶應義塾大学総合政策学部 教授

1972年生まれ。専門は国際政治、コーカサスを中心とした旧ソ連地域研究、紛争・平和研究。近著に『ハイブリッド戦争 ロシアの新しい国家戦略』（講談社現代新書）。

本戦争の前半ではロシアが遅かれ早かれ音を上げるという予測もあったが、時が流れるにつれ「時間はロシアに味方する」展開が濃厚となっていた。ロシアは世界一広大な国土を持ち、世界有数の資源大国であり、豊富な穀物を中心とした農産物を生産できる「持てる国」だ。各国の安全保障の根幹となっている「エネルギー」と「食



ウクライナ国内の被害は大きい。戦後復興に向け日本の支援が期待されている

GLOBAL IMAGES UKRAINE/GETTYIMAGES